

〔泌尿紀要13巻2号〕  
昭和42年2月

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 13 巻 第 2 号

昭和 42 年 2 月

## 随 想

### 恥 の 書 き 集 め

京都大学助教授 酒 徳 治 三 郎

長年に亘って皮膚科との寄合所帯を余儀なくしていた旧建築物が、移転のために取り払われたのは昨冬のことである。大正2年に竣工したこの木造建築の中に、古い設計図面によると「恥室」と呼ばれた一室があって、これが京大泌尿器科診察室の最初の姿と考えられる。この部屋は次いで洗滌場と改称されて性病の診療室として利用され、近年では性病患者の激減のために研究室に転用されていた。大正初年の泌科診察室を、いみじくも恥室と名付けたことに興味をひかれたことと、「恥」という語に対する日本人的感觉と泌尿器科の関連性について、私なりに2, 3心に浮んだ点があるので、ここに駄文を弄することをお許しいただきたい。

わが国の近世史を顧みると、閉鎖的な封建社会において武士道が確立され、これが敗戦前まで国民思想のバックボーンをなしていた。武士道によると、恥をかかされることはすなわち死を意味するものであった。主君や一族一門の恥を雪ぐため、あたら一命を失なった武士は枚挙に遑がない。さらに儒学、朱子学、道学などの研究が、このような体面を重んずる風潮に拍車を掛け、ひき続き明治以降の軍国国家に移行していった。明治時代からは、東洋の君子国たる矜持を保つための文教政策が江湖に遍く行き渡り、かつ対外的には雪辱の旗印の下に戦争が次々と拡大された。かの戦陣訓の中に「生キテ虜囚ノ辱カンメラウケルヨリ云々」と恥イコール死であることを謳った個条もみられ、当時の日本人は恥辱に対して極端な強迫観念を懐くようになり、さらに表面上では潔癖を装うことによって自らの品位を保つように智恵づけられて来たのである。

ここで泌尿器科関係で使用される恥という語について考えてみよう。恥丘、恥骨などの術語のほかにも、恥部、恥毛などと如何に恥を冠した語が多いことか。この故に恥室という語が生れたのであろう。これらの性器に与えられた名称は、独逸語の Scham- に由来しているのであろう。しかし Scham は shy, はじらい、内気な、の義であって、Schände, disgrace, 恥辱、不名誉、とは意を異にするのである。さらに pubic は puberty と同系語であって恥辱という概念からはほど遠い。しかるに残念ながらわが国ではこれらの述語に恥という字が冠せられてしまった。潔癖で恥という語に過敏な日本人は、恥- と呼ばれる性器に対しては陰蔽する傾向が強くなった。これが募つて、恥部に関することは口に出すのも穢らわしいと解されて来た。このような国民的感觉からすると、恥部の疾患は誠に不名誉なものであり、格好が悪くて世間様に顔むけ出来ないとし、患者自身は素より、家族にとっても他の疾患と比較にならぬ程の心痛事であるものと考えられる。

このような社会的背景が、わが国における泌尿器科学の啓蒙に対して、若干の影響をおよぼしていると思われる。例えば卑近なことでは、私自身も泌尿器科入局に際して、他科の先輩から「そんなけつたいな科に入局しなくても」とのお説教を頂戴したし、教室員の中にも両親を説得させるまでが大変だったとの話も少なくない。さらに同意がえられず、止むなく「もっとましな科」に入局した学友もあった。どうも日本においては恥部を診療研究の対象としている泌尿器科が、恰も賤業であるかのような錯覚に陥っている者があるのは、誠に歎かわしいことである。またマスコミでも脳とか心臓であれば、見て呉れがよいので取り上げ易いが、泌尿器系であれば、その発表にはややしりごみする傾向にある。私達泌尿器科医はこれらの抵抗に打克って、泌尿器科の真の姿を示して国民に馴染み易いものにし、その健康を増進させる責務があると思われる。

患者に接すると、厳しい現実と直面していることを思い知らされるのである。切角家庭医からの紹介状をもらいながら、泌尿器科受診を恥じて、時期を失った膀胱癌患者などは、現在泌科に携わっている者が等しく経験していることであろう。また恥かしいから、診断書には別の病名に換えてもらえないかなどという患者もある。かかる時には「病に貴賤はない」とか「病気に上下の差別はない」などの諺を挙げ、性器が決して患者の思っている恥部ではないのだと力説に努めている次第である。

恥知らずな政治屋達の黒い霧の漂っている昨今の新聞ではあるが、その死亡記事で、死因は前立腺癌などと真の病名が明記されている方には、本人は素より、遺族や医療にあたった者の態度がそこはかとなく窺われて、当然のこととはいえ敬服するのである。しかしわれわれが治療していた患者で、退院後明らかに泌尿器疾患で死亡した者が、新聞紙上では老衰、転移性肺癌などとなっていると、私達の努力の到らぬ点もあって、極めて後味が悪い。遺族や関係者が、故人の病名が泌尿器のものであることを公表するのは、死者に対しては不敬となり、同族一門の恥とせねばならぬ事情が、このような記事になって表われると思われる。これらの事柄に接する度に、かような状態ではわが国において完全な死因統計が果して成されているのであろうか、泌尿器癌死亡数が諸外国に比して桁違いに少ないのも、あるいはかかる風潮に災いされているのでなからうか、などとあらぬ想像さえしたくなる。泌尿器科領域の疾患名が、一般の人の間でもフランクに取り上げられるようになる日が早く来ることを願うと共に、この方面への啓蒙に、私達泌尿器科医の努力が望まれる次第である。

ここまで書き綴った時、勃然として、陰にこもった声が地底から伝わって来た。『お前は大変口幅ったいことをいっているが、若しお前自身が前立腺癌になった時はどうだ?』『そんなものは普通の病気じゃないか。恥かしいとか何とか問題にするのがどうかしている。』『それでは、睪丸腫瘍で命を落した時はどうだ?』『仕方がないじゃないか。別に恥でも何でもない。』『では陰茎癌で死んだとしても平気なのか?』『う……』ここで返答に窮してしまった。どうも陰茎癌では死にたくない。どういう根拠からだろう。早期発見の容易な陰茎癌で落命することは、泌尿器科医として恥になるというのであろうか。しかしそれだけではないプラスアルファがあるようだ。理由は定かではないが、やはり陰茎癌では死にきれないように思う。陰茎癌よ勘弁してくれ。私はまだ冷徹な泌尿器科医になり切れていないことを恥じねばならない。

誠に恥多き一文をここに記したためて了ったことは慚愧に耐えない。この拙文が、泌尿器科紀要の随想として恥という程でもなければお許しいただきたい。